

## Lesson 21 Beginner Theory 2 - Harmonized Major Scale

### Lesson 21 基礎理論2 - ハーモナイズド・メジャースケール

\*Robben の説明において、「ハーモナイズド・メジャースケール」は「ダイアトニックコード」と同義

今回は C メジャースケールを使ったハーモナイゼーションを学ぼう。

C メジャースケールをハーモナイゼーションするということは、各音を 3 度堆積の 3 和音 (トライアド) にしていくということだ。(訳者注: 一般的にハーモナイゼーションとは、あるメロディにコードを付けていくことだが、ここでは、C メジャースケールのダイアトニックコードを組み立てるという意味合い)

ギターだと分かりにくいけど、ピアノの鍵盤上で見てみるととても分かりやすい。

3 和音 (トライアド) とは、トニック (1 度) + 3 度 + 5 度を積み重ねた基本コードのこと。

(0:41)

C メジャースケールの場合は、まず 1 度 (トニック) (5 弦 3 フレット C)、2 度 (4 弦開放 D)、3 度 (4 弦 2 フレット E)、4 度 (4 弦 3 フレット F)、そして 5 度 (3 弦開放 G) …の順番に進むよね。

このそれぞれの音の上に 3 度と 5 度を積み重ねてゆけばトライアドの完成。

例えば、トニック (5 弦 3 フレット C) に、3 度 (4 弦 2 フレット E)、5 度 (3 弦開放 G) を重ねて、3 つを同時に弾けば C トライアドだね。

これを別の言い方で「I コード」と呼ぶよ。

コード進行を言う時に「I - VI - II - V」なんて言い方を耳にしたことはないかな？

「I コード」、その次が「VI コード」、その次が「II コード」、そして「V コード」…という感じだ。

(1:17)

ということで、まず最初のトライアドがこれ。『トニック (5 弦 3 フレット C)、3 度 (4 弦 2 フレット E)、5 度 (3 弦開放 G) の 3 つ』つまりこれが C トライアドだ。

みんなも知っている C コード (と同じ型) だから理解しやすいね。

こんな感じで C メジャースケールを構成する各音に沿ってトライアドを作ってゆく。

---

【以下、Robben の説明が若干分かりにくいので、大局を壊さないよう留意しながら訳者が説明】

#### 次の Dm トライアドの作り方

C トライアドを構成する 3 つの音それぞれを次のような考えのもと、上げてゆく。

C メジャースケール「ドレミファソラシド…」を大前提として、C トライアド (ドミソ) の各音をそれに基づいてそれぞれ 1 つ上げる。

つまり Dm トライアドを作る場合、C トライアドの各音を 1 つずつ上げる：

ド(C)の次はレ(D)

ミ(E)の次はファ(F)

ソ(G)の次はラ(A)

結果的に Dm トライアドは『トニック (5 弦 5 フレット D)、3 度 (4 弦 3 フレット F)、5 度 (3 弦 2 フレット A) の 3 つ』ということになる。

### 次の Em トライアドの作り方

Dm トライアドと同じ要領で…

レ(D)の次はミ (E)

ファ(F)の次はソ(G)

ラ(A)の次はシ(B)

結果的に Em トライアドは『トニック (5 弦 7 フレット E)、3 度 (4 弦 5 フレット G)、5 度 (3 弦 4 フレット B) の 3 つ』ということになる。

---

(2:44)

こんな感じで、メジャースケールに沿ってトライアドを作ってゆく。

ピアノの鍵盤だと視覚的に非常に分かりやすい。

C トライアドの「ドミソ」の各 3 音の間隔を保ったまま Dm トライアド、Em トライアド、F トライアド…という風にして行ってやればいい。

(C から Dm へ行く場合) 1 度を 2 度に、3 度を 4 度に、5 度を 6 度に…という要領で、3 音を 1 セットとして C メジャースケールに沿って上げて行けばいいんだ。

-playing(3:20)-

これがハーモナイズド・メジャースケールだ。

(3:37)

この C のハーモナイズド・メジャースケールが今後やる「モード」を考える際の土台になる。

実際、今回紹介した C ハーモナイズド・メジャースケールだけど、初心者には運指的に少し弾きづらいかもしれないね。

-playing(3:59)-

でも、このサウンドを耳に馴染ませることが大切なんだ。

同時に、「I コード」とか「IVコード」「Vコード」という呼び方・考え方も身に付けて欲しい。

(例えば、C ハーモナイズド・メジャースケールにおいて)「I-IV」という進行の場合、C (I コード) -F (IV コード) となる。

-playing(4:39)- (そして V (G トライアド) も加えると… I コード、II コード、V コード、VI コード、VII コード、そしてもう一度 I コード)

(5:01)

繰り返しになるけど、このサウンドを耳に馴染ませて、ハーモナイズド・メジャースケールの仕組みと、「I」「IV」などの呼び方を是非習得して欲しい。

【注記】

- ・押弦するポイントについて Robben は様々な言い方をしていますが、ここでは「5 弦 3 フレット C」「6 弦開放 E」などの表記に統一します。
- ・翻訳モノにありがちな読み難さの一因となっている「直訳」を排除した結果、Robben の実際の言葉とは若干違った表現になっている箇所がありますが、読者にとってのストレスのない自然な理解を促すためのものであり、Robben が言わんとしていることはそのままに、大局を損なうことのない翻訳を心がけました。
- ・モードの解説において「○○スケール」と「○○モード」の言葉の使い分けはせず、Robben の言に最大限忠実に訳しながらも、より理解をしやすいように、柔軟にそれぞれを言い換えて訳しているケースもあります。

翻訳 山岸敦